

# 振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は福井県高浜町、佐賀県玄海町、福島県川内村の取り組みを紹介します。



## 里山観光の拠点となる『青葉山ハーバルビレッジ』がオープン

福井県高浜町 地図A

福井県高浜町の青葉山は、標高693m、円錐型の美しい姿で、『若狭富士』とも呼ばれています。

また、麓の青海神社に「青葉山遙拝所」があるように、神聖な山として、古くから信仰を集めてきました。修験の山としても知られ、近代までは入山に厳しい規制が加えられていました。北陸と近畿の境界にあり、北方と南方の多様な植物が自生し、希少植物も多く、野草や薬草の宝庫であることも知られています。ここだけにしか自生しない天然記念物の『オオキンレイカ』をはじめ、山麓には生薬などに活用できる植物が373種も自生しており、薬草の宝庫として専門家にも注目されているところなのです。



高浜漁港から見た青葉山



キャンプサイト

その青葉山麓に本年5月、『青葉山ハーバルビレッジ』が誕生しました。

高浜町では青葉山麓中山地区を「健康長寿の里」として整備を進めてきましたが、これは、従来からあった『青葉山青少年旅行村』をリニューアルしたものの。今回、歴史や文化、食などの地域資源を活かした「ふるさと創造プロジェクト」として、再整備されました。

この『青葉山ハーバルビレッジ』は、薬草の農業ビジネスの拠点であると同時に、体験交流施設としても中核になるものです。園内には、ハーブを使ったド

リンクや食事が楽しめるカフェや、ハーブティー・薬草染などを販売するショップ、ワークシヨップホール、キャンプサイト、薬草が見られるハーブガーデンなどが整備されています。

青葉山の豊かな自然と、これらの施設を活用して、「野遊びとハーブのピギナーズアウトドアスクール」を開設しているのも大きな特徴です。このスクールではマイスター制度を設けており、スクール参加者は毎週末開催される様々な自然体験プログラムを、一定数受講することで「マイスター」として認定さ



ショップ『Shop693』

カフェ『あおはやまてらす』



## 「ふるさと納税」を機に「養殖真鯛のブランド化を進める

佐賀県玄海町 地図B

玄海町では、ふるさと応援寄附金（ふるさと納税）の返礼品として人気が高まったのを機に、町内仮屋湾の「養殖真鯛のブランド化プロジェクト」が進められています。

仮屋湾沖で真鯛の養殖が始まったのは昭和40年代の後半で、現在約100万尾の鯛を養殖しており、昨年度の出荷額は約208トン、売上額1億6,000万円の県内最大の産地となっています。

この養殖真鯛の特徴は、その

美しい姿はもちろんのこと、ぷりぷりとした食感と甘みのある味。その秘密は飼育方法と配合飼料にあります。稚魚から育てて丸3年と、他の養殖鯛に比べて飼育期間は長く、いけすも20m四方と非常に大きいので、じっくり時間をかけストレスのない健康な真鯛が育ちます。

さらに、餌となる配合飼料は工夫を凝らしており、通常の配合飼料よりも魚粉の配合量が多く、すべての生産者で共有しています。この脂の乗った養殖真



『真鯛祭り』

養殖風景



『真鯛祭り』でふるまわれた塩焼き



姿、味ともに見事な 仮屋湾の養殖真鯛

鯛は、プロの料理人からの評価も高いものとなっています。しかし、仮屋湾の養殖真鯛を取り巻く環境は必ずしも良いとはいえ、最近はい手不足や、飼料の高騰などで低迷していま

した。再度注目され出したのは、玄海町が行う「ふるさと納税」でした。その返

礼品に、この「仮屋湾の養殖真鯛」を送ったところ、納税者の反響が大きく、本格的に養殖真鯛のブランド化を進めるきっかけとなりました。

昨年、首都圏の有名店のシェフを玄海町に招き、養殖真鯛を売り出すためのアイデアを探る『シェフズキャンプ』を開催する一方、さらなる情報発信を行うため、仮屋漁協では『仮屋湾の真鯛』のサイトをリニューアルしました。

さらに、本年3月19日から21

日までの3日間、玄海町内で『真鯛祭り』を開催して、町内外から約2,000名の来訪者を集めました。玄海海上温泉パリア前のイベント広場では、鯛の塩焼きや鯛めしなどのふるまいに加え、真鯛のエサやり体験クルージングなど漁師町ならではのイベントが開催されました。

このイベントにはコラボ企画として玄海町飲食業組合も参加、各店で仮屋湾の真鯛を使ったスペシャルメニューが販売されました。

## 小学生の提言で実現した 『第1回川内の郷かえるマラソン』

福島県川内村 地図

去る4月30日、福島県川内村で、『第1回川内の郷かえるマラソン』復興から創生への折り返し『が開催され、澄み切った空気の中、市民ランナー1,188人が、新緑の川内村を駆け抜けました。

この大会は、北海道から沖縄まで、全国から集った参加ランナーに加え、ボランティアや応援に来た人を含めると、村の人口を超える2,000名の人々が参加する盛大なものとなりました。

日本を代表する川内優輝選手や吉田香織選手も、ゲストラン

象に、「復興子ども教室」が開催されています。この教室は「川内村の将来を担う子どもたちが自ら考え、判断し、行動する力を育むとともに、川内村の復興や社会に貢献できる人間として成長してくれることを願う」という趣旨で、帰還直後から行われている事業です。

毎回、村長をはじめとした行政職員や地域住民から、復興への取り組みを聞き、放射線などに関する長崎大学の学生との対話や、実際に長崎を訪問するなどの交流も行っています。その中で、子どもたちは地域の復興や、社会に貢献する力を学習してきました。

昨年の11月、3回目となる「復興子ども教室」で、ある生徒が「村でのマラソン大会の開催」を特別講師であった遠藤雄幸村長に提案しました。「マラソン大会なら、村が復興する姿を、多くの人に 見てもらえる」のでは ないもの でした。

村は、この生徒の提言に 応え、すぐさま実行委員会を立ち上



川内優輝選手も参加



全国から市民ランナーが集まる



復興子ども教室

げました。川内村に生息する天然記念物の「モリアオガエル」にちなみ、『川内の郷かえるマラソン』と名付け、短期間でしたが、本年4月の開催にこぎつけました。結果、全国から多くの市民ランナーが参加し、川内村の住民との交流を楽しむこととなりました。

ひとりの小学生の提言で始まった、このマラソン大会ですが、川内村再生を願う子供たちの思いが、大きく広がったものとして注目され、次回の開催も期待されています。